

被爆した南方特別留学生に関する記憶と表象の史的展開について

平野 裕次

はじめに

二〇一九年四月二五日、広島平和記念資料館の本館がリニューアルオープンし、新たに設置された外国人被爆者をテーマとしたコーナーで、常設展示としては初めて、被爆した南方特別留学生の写真や絵が展示された^①。今回の展示更新にあたっては、一〇七年七月に策定された「広島平和記念資料館展示整備等基本計画」の当初の段階から、外国人被爆者の存在を紹介することが盛り込まれていた^②。

このように近年になってようやく平和記念資料館のような公的な博物館においても、外国人被爆者が主要な展示テーマとして扱われるようになった。これまでその展示が進まなかった背景として、被爆の記憶が日本社会の中で国民化していく過程でマイノリティとしての外国人被爆者の存在が周縁化され、必ずしも展示の主要な関心とはなりえなかったという事実が指摘できるだろう。

本稿では、外国人被爆者の中でも特に広島で被爆した南方特別

留学生を対象として、彼らが戦後の日本社会においてどのような記憶され、表象されてきたのか、その史的展開について考察する。筆者は既に五〇年代半ばから六〇年代半ばまでの時期を対象とした論考において、被爆した南方特別留学生に関する社会的記憶の「想起」の過程を分析したが^③、本論ではその「記憶」の原型が七〇年代以降どのような「表象」として展開されてきたのかについても検討し、これらを戦後から現代に至るまでの流れの中に位置づけ直して、その史的展開についての考察を進めていきたい。

1 南方特別留学生の被爆状況

本論に入る前に、南方特別留学生の被爆状況について確認しておきたい。外国人被爆者の人数についてはいまだ不明な点が多く、正確な数字の把握は困難であるが、周知のとおり朝鮮半島出身の被爆者が数万人と群を抜いて最も多く、南方特別留学生については八人が被爆し、内二人の留学生が被爆死しており、外国人被爆者の中でも少ない人数である。

また、広島で被爆した南方特別留学生の一覧を次のとおり示した。⁽⁴⁾

(一期生)

サイド・オマール(マライ出身、被爆死)

ニック・ユソフ(マライ出身、被爆死)

アディル・サガラ(スマトラ出身、直接被爆)

モハマド・タルミディ(ジャワ出身、直接被爆)

ムスカルナ・サストラネガラ(ジャワ出身、被爆を免れる)

(二期生)

アブドゥル・ラザク(マライ出身、直接被爆)

アリフィン・ベイ(スマトラ出身、直接被爆)

ハッサン・ラハヤ(ジャワ出身、直接被爆)

ペンギラン・ユソフ(北ボルネオ出身、直接被爆)

原爆投下時、広島文理科大学には九人の南方特別留学生が在学しており、郊外の病院に入院していた一人を除く八人の留学生が被爆した。

マライからの留学生ニック・ユソフは、被爆後、広島市内から西部方面に避難したが、八月七日に広島市郊外の五日市において死亡したと推定されている。その後、その遺骨が五日市にある光禅寺に保管された。

同じくマライ出身のサイド・オマールは、終戦後、東京に戻る途中で立ち寄った京都で病状が悪化し、京都帝国大学附属病院に

入院した。同病院の浜島義博医師がオマールの治療にあたったが、白血球が異常に少なくなっており、当時の医療状況では自分の血液を輸血する以外に方法がなかった。懸命の治療活動にも関わらずオマールは九月四日早朝に亡くなった⁽⁵⁾。彼の遺体は、京都北白川教会の奥田成孝牧師と留学生らにより、その日の内に大日山にある京都市営墓地にイスラム教の教義に則って埋葬された。生き残った六人の留学生は、戦後の混乱の中を母国に帰国している。

2 戦後の日本社会における記憶と表象の展開

戦後の日本社会における被爆した南方特別留学生に関する記憶と表象の展開については、次のとおり大きく四つの時期に分けることができる。

第一期(一九四五～五六)は、関係者だけに語られるローカルのインシユールとして存在していた時代、第二期(一九五七～八一)は、日本社会において被爆した南方特別留学生が「発見」され、「想起」されて、社会的な「記憶」として登録されていく時代、第三期(一九八二～九五)は、被爆した留学生の来日が相次いで彼らの被爆実態が明らかになるとともに、原爆文学や平和学習としての対象化が進行することによって、その「表象」が展開されていく時代、第四期(一九九六～現在)は、被爆した留学生や関係者の高齢化あるいは死去に伴い、その記憶の継承が課題となっていく時代である。

以下、右の時期区分にしたがって考察を進めていく。

第一期 関係者だけに語られるローカルなイシュー

(一九四五〜五六)

(一) 被爆直後からサンフランシスコ講和条約発効まで

第一期においては、被爆した南方特別留学生の存在が戦後の公的空間の中で取り上げられることはなく、関係者だけに語られるローカルなイシューとして存在していた。そもそも原爆被災者だけが特別ではなく、日本各地に多くの戦災者が存在し、原爆被災は一般の戦争被害の中に埋没していた⁽⁵⁾。また、連合国軍によるプレスコードの実施によって、原爆に関する新聞記事や雑誌・本は発禁処分とされ、原爆被害そのものを語る事が困難な時期であった。

こうしたなか、稲富栄次郎『世紀の閃光』(広島図書、一九四九年)⁽⁶⁾において、出版物としては初めて南方特別留学生が被爆したという事実が記されている。稲富は、被爆当時広島文理科大学の教授であり、被爆した永原敏夫教授の後任の留學生担当主任として南方特別留學生を見舞う様子が描かれている。この場面は、後年『広島原爆戦災誌』(広島市、一九七一年)にも引用された。

(二) 原水爆問題の高揚

一九五四年三月、遠洋マグロ漁船の第五福竜丸がビキニ環礁での水爆実験により被ばくし、これを受けて原水爆禁止運動が高揚した。翌五五年には広島市で第一回原水爆禁止世界大会が開催された。

また、五七年七月の新聞報道では、原爆投下から一三年目を迎えるにあたって「これまで顧みられなかった外人の犠牲者たちがいることが分った」として、被爆死した米兵捕虜に関する報道とともに、原水爆禁止日本協議会が生き残りの南方特別留學生を第三回原水爆禁止世界大会に招待して、従来の救援運動を一步前進させて被爆外国人留學生の救援を国際的な問題として取り上げることとなったことを報じている⁽⁸⁾。

こうして五七年以降、被爆した南方特別留學生の存在が日本社会において「発見」されていった。

第二期 被爆した南方特別留學生の「発見」、「想起」から

「記憶」へ (一九五七〜八一)

第二期において被爆した南方特別留學生は社会的にどのような「想起」され、「記憶」されていくのか、その過程を考察する。ある歴史的な事象を社会的記憶に媒介する装置としては、記念誌の作成や記念碑の建設、記念行事の実施等が挙げられるが、ここでは(一)記念誌の作成、(二)墓碑の建立、(三)遺族の墓参、(四)記念碑の建設に焦点を当ててその検討をおこなう。

(一) 記念誌の作成

一九五七年七月、被爆死したサイド・オマールの実兄サイド・モフセン・アルサゴフから広島大学長や広島市長宛てにオマールの死亡証明書を依頼する書簡が届いた。この依頼を受けて、広島大学は京都大学附属病院に死亡診断書の交付を依頼するとともに

に、当時の教職員や学生、広島市民への照会を通じて南方特別留學生の被爆実態の解明に着手した⁽⁹⁾。

なお、当時の新聞には被爆死した二人の南方特別留學生の墓を建立して遺族を日本に招きたいとする記事が掲載され⁽¹⁰⁾、アルサゴフからの書簡についても「留學中に原爆死した弟の死亡証明を」として報道された⁽¹¹⁾。このように先述した第三回原水爆禁止世界大会への被爆留學生の招へいに関する記事も含めて、五七年七月以降新聞報道で被爆した南方特別留學生に関する話題が連続して取り上げられている。

翌五八年一月、広島大学はアルサゴフへオマールの死亡診断書を送付した。それに対するアルサゴフからの返信の手紙には、診断書は亡弟の遺産管理権の申請のためシンガポールの裁判所に提出されたことが記されていた。五七年八月三一日にマラヤ連邦は英国から独立しているが、統治体制の変更によってそれまで自明であった市民権や財産権の安定性が揺らぐ可能性が十分にあり、マラヤ連邦の独立を前にして、アルサゴフは亡弟の遺産の管理権を明確にするために死亡証明書を必要としていたのではないだろうか。つまりこの年に突然、被爆死したオマールの死亡証明書を依頼したのはマラヤ連邦の英国からの独立が背景としてあったといえよう⁽¹²⁾。

これら一連の被爆実態解明の努力は、広島大学の公的な記憶となり、七五年に刊行される『生死の火 広島大学原爆被災誌』作成の際の重要な記録として引き継がれていった。

なお、右に関連するこの時期の事項として、七一年に広島市から『広島原爆被災誌』が発刊され、被爆した南方特別留學生アリ

フィン・ベイの被爆証言が掲載された。また同年、NHKのドキュメンタリー番組として「被爆者ユソフ ブルネイ王国首相の証言」が放映され、ブルネイ初代首相となったペンギラン・ユソフが、番組の中で広島での被爆体験を語っている⁽¹³⁾。

(二―二) 墓碑の建立

一九六一年九月、サイド・オマールの墓が京都・圓光寺で再建される。そのきっかけとなったのは週刊誌に掲載された「あるマラヤ人の墓」と題する記事であった⁽¹⁴⁾。その内容は、五七年にオマールの実妹が京都でオマールの墓を探したものの見つからずに帰国した後、ある篤志家がオマールの墓を発見したというものだった。これを受けて、日本マレー・シンガポール協会が墓の再建計画を立てたが、経済的な理由で難航していると伝えている。「朽ち果てそうなオマール君の墓」と題して、棒杭二本で墓としている写真も掲載された。

これを読んだ京都在住の園部英文が、「これは京都の恥」だからと言って、京都市役所に勤める実弟の健吉に墓碑建設資金の一部として二千円を預けた。以後、園部健吉ら京都市民が中心となって墓碑の再建が進められる。墓石は神戸のイスラム教寺院からの助言を得て石材店「石寅」がイスラム教式に製作し、圓光寺が墓地を提供した。また武者小路実篤が碑文を作成した。こうして六一年九月二日、大日山の墓地からオマールの遺骸が発掘され、その日のうちに圓光寺に移された。翌日、新しい墓前で法要が執りおこなわれた⁽¹⁵⁾。当時の新聞には「原爆に散った留學生に市民の善意」との見出しで、オマールのために京都市民の善意により

立派な墓が作られ、手厚く葬られたことが報じられている。⁽¹⁶⁾

しかし、このようなオマールの二度の埋葬については異論もあった。これによると、圓光寺に墓が再建されなければオマールの存在は忘れ去られていたかもしれないので、この意味で圓光寺の墓が果たした役割は大変大きいとしつつも、オマールの二度の埋葬はイスラム教の葬りに関する重大な誤解に基づくものであったと述べている。すなわち、四五年の最初の埋葬は細部に至るまでイスラム教の定めに従った手厚いものであったが、その後の墓の再建により土葬されていた遺骸を掘り起こして改葬することはイスラム教に対する重大な誤解に基づくものであると考える。⁽¹⁷⁾ ここには原爆犠牲者と宗教との関わりが死者の葬りの問題として提起されている。因みに被爆した南方特別留學生は八人全員がイスラム教徒であった。

また、六四年五月にニツク・ユソフの墓碑が広島市郊外の五日市・光禪寺に建立された。墓は遺族の来日にあわせて光禪寺の星月農人住職が墓地・墓石を提供して作られた。⁽¹⁸⁾

(二一三) 遺族の墓参

一九六四年五月、アジア学生文化協会はオマールとニツク・ユソフの墓参のために遺族を日本に招へいた。遺族らは訪問先の京都や広島で、新聞社やテレビ局等からの取材を受けるとともに、当時の留學生を知る者や墓碑の建立に尽力した関係者とも懇談している。⁽¹⁹⁾

帰国後、墓参訪問団の参加者からは感謝の意を記したお礼状が届いた。マレーシア外務省のジャイス情報担当官は、「私たちは

子々孫々までこうした日本の方々の温いおとりはからいを忘れることはできません」、「その死後は肉親でさえこれ以上はできないと思われるほど丁重に弔われております」と述べている。⁽²⁰⁾

このように遺族の墓参は両国の友好親善を象徴する出来事となったが、その実現のためにマラヤ連邦大使館は積極的に協力を申し出るとともに、日本政府・外務省もこれを支援していた。その背景には何があったのだろうか。六二年一月にシンガポールで日本占領期に犠牲となった華人の骨が大量に発見され、これがマレーシアにも波及して「血債問題」へと発展していった。以後、華人を中心として「血債」補償要求の運動が拡大していく。このような情勢のなかで、マレーシアにおける対日不信感を少しでも和らげるためにも、日本国民が原爆で犠牲になった留學生を慰霊することを両国政府として積極的に支援したのではないだろうか。⁽²¹⁾

以上、(二一一) から (二一三) までを小括すると、被爆した南方特別留學生はわずか一〇人にも満たない少ない人数であったが、外国人被爆者の中では比較的早い時期(五〇年代後半以降)から新聞や雑誌で取り上げられてきたといえる。またその背景として、当時の日本を取りまく国際的な要因が大きく影響を及ぼしていた点が挙げられる。それは当時の原水爆禁止運動を世界的にしようとする動きやマラヤ連邦の独立、東南アジアに依然として残っていた対日不信感の払拭等であった。朝鮮人被爆者問題も六五年の日韓基本条約の締結以降、日本社会で大きく取り上げられるようになったが⁽²²⁾、外国人被爆者をめぐる諸問題は、その時代の日本を取り巻く国際関係や国際情勢の影響を少なからず受けて

きたといえるだろう。⁽²³⁾

(二一四) 記念碑の建設

南方特別留學生のための学生寮は興南寮と呼ばれていたが、原爆により倒壊して焼失した。戦時中に南方特別留學生と親交のあった花岡俊男は、戦後彼らと連絡を取り合っていくなかで興南寮が今どうなっているかを問いかけられた。花岡は興南寮の存在を風化させてはいけないと考えるようになり、その記念碑を建設することを決心する。

しかし河川法等の法の縛りや近隣住民の理解、建設費の捻出等の諸問題が山積し、この計画はなかなか進まなかった。その解決のために記念碑の建設委員会を発足させ、各方面に建設費の負担等の協力を呼びかけて、七六年に興南寮跡碑の除幕式が挙行された。⁽²⁴⁾ なお、現存する碑は九五年に花岡によって建て替えられたものである。⁽²⁵⁾

興南寮跡碑は、南方特別留學生が広島に留学して、被爆したことを伝える重要なモノユメントとなっている。被爆五〇年を迎えた九五年には広島で学んだ南方特別留學生九人が同碑の前で五〇年ぶりの同窓会をおこなった。また、校区内にサイド・オマールの墓がある京都・修学院小学校は、広島への修学旅行の際に興南寮跡碑前で平和集会をおこなっている。このように同碑は被爆した南方特別留學生の存在を思い起こさせる場を提供している。

以上のとおり、日本社会における被爆した南方特別留學生に關する記憶は、記念誌の作成や記念碑、墓碑の建設等により第二期

にその原型が形成され、第三期（八〇年代以降）の表象の展開を方向づけるものとなっている。

第三期 被爆した南方特別留學生に関する表象の展開

(一九八二〜九五)

(三一) 被爆した留學生の広島訪問

一九八〇年代以降、被爆した南方特別留學生が相次いで広島を訪問する。江上の研究によると、ペンギラン・ユソフ（八二、八三、九二年）に来広、以下同、ハッサン・ラハヤ（八三、九三年）、アブドウル・ラザク（八三、八八、九三年）、アリアフィン・ベイ（八四年）、アディル・サガラ（八五年）が広島を訪問して関係者からの歓迎を受けるとともに、その多くが被爆者健康手帳を受領した。⁽²⁶⁾

この時期、彼らは六〇代に差し掛かり、母国で首相や国会議員、大学教員等の社会的地位を得て、ようやく自らが被爆した広島への地を訪問できる環境が整ってきたといえよう。広島では報道陣や市民の前で自身の被爆体験を語るようになっていった。

(三二) 被爆実態の解明、文学作品としての対象化

また一九八〇年代以降、南方特別留學生の被爆実態の解明や文学作品として対象化が進んでいく。

八三年、広島大学の国際主幹を務めていた江上芳郎は、国内外の多数の関係者からの聞き取り調査を基に「南方特別留學生と原子爆弾被爆」と題する論考を発表した。⁽²⁷⁾ これにより彼らの被爆状況の詳細が明らかとなった。

また、中山士朗『天の羊——被爆死した南方特別留学生』（三交社、一九八二年）では、被爆作家である同氏が被爆死したサイド・オマールとニック・ユソフの両名について調べていくなかで、彼らの日本での留学生活や被爆状況が明らかにされていく様子をルポルターージュ作品として描いている。

同書のとがきには「こと原子爆弾に関しては、日本人はともすれば日本人のみが被害者であるという意識が強いが、二人の死を考える時、あきらかに私たちは加害者といわなければならぬだろう」と述べ、被爆死した南方特別留学生の問題を被害と加害の問題として捉えている。

なお、同作品は後に家永三郎他（編）『日本の原爆記録 第一三巻』（日本図書センター、一九九一年）に再録され、黒古一夫による解説「国境をこえる被爆のうめき」においても、「あらためて強調しておくが、『ヒロシマ・ナガサキ』で被害にあったのは日本人だけではなかったのである」と述べ、被爆の記憶の国民化に警鐘を鳴らしている。

更に、児童文学作家のかつおきんやは、アブドウル・ラザクの証言と江上や中山の著作等を基にして、ラザクの生い立ちや日本留学中の生活、広島での被爆、帰国するまでの話を児童文学として描いた『マレーシアの語り人』（汐文社、一九八五年）を著した。

これらの作品は日本で刊行されたものであるが、マレーシアではオスマン・プティ『Debu Hiroshima（広島の灰）』（国立言語図書研究所、一九八七年）が出版された。同書では、アブドウル・ラザクが南方特別留学生として選抜され、日本での留学中に広島で被爆し、マラヤに帰国するまでの話が描かれている。日本でもす

ぐに邦訳され、『わが心のヒロシマ——マラヤから来た南方特別留学生』（勁草書房、一九九一年）として出版されている。訳者のまえがきには「同書は（マレーシアで——筆者注）たちまち大きな反響を呼び、すでに重版されている」、「南方特別留学生の広島被爆記録については日本側に詳細な報告はあるものの（中略）東南アジア側からの報告がこれまでなかっただけに、原著の持つ意義は大きい」と述べている。

なお、ラザクの被爆体験はNHKのドキュメンタリー番組「わが心のヒロシマ あるマレーシア人被爆者の青春」（一九八八年）として放映された。この番組では、ラザクが広島を再訪して当時の被爆状況を振り返る様子や、母国マレーシアで自身の被爆体験を子どもたちに語り伝えている様子が映し出されている。

（三一三）被爆した留学生の平和記念式典参加（一九九五年）

一九九〇年代前半から九五年に至る時期は戦後五〇年、被爆五〇年を迎え、被爆した南方特別留学生の存在が最も大きく取り上げられた時期であった。こうしたなか、九五年八月に「南方特別留学生戦後五〇年記念大会」が東京にて開催され、約一〇〇人の南方留学生が参加した⁽⁸⁾。その後、広島で学んだ留学生九名（被爆留学生を含む）は、広島を訪問して平和記念式典に参列した。式典後、興南寮跡碑の前で五〇年ぶりの同窓会をおこなった後、ニック・ユソフとサイド・オマールの墓参のために広島五日市・光禅寺および京都・圓光寺を訪問した。京都ではオマールを題材とした平和学習に積極的に取り組んでいる修学院小学校も訪問しているが、この点については後述する。

留学生の東京、広島、京都への訪問の様子は、広島のテレビ局 RCC 中国放送の特集番組「南方特別留学生 五〇年目の同窓会」(一九九五年)として放映された。

また、この時期は南方特別留学生の戦後の歩みを扱った記事が多く出された。例えば、雑誌では「大東亜の人質 南方特別留学生の半世紀」と題する特集記事が組まれた⁽²⁹⁾。共同通信社も戦後五〇年企画として南方特別留学生の戦後の半世紀をテーマとした記事を新聞紙上で連載し、これらは『アジア戦時留学生 「トージョー」が招いた若者たちの半世紀』(共同通信社、一九九六年)として単行本化された。

なお、共同通信社の戦後五〇年企画のきっかけとなった本が上遠野寛子『東南アジアの弟たち 素顔の南方特別留学生』(三交社、一九八五年)である⁽³⁰⁾。戦時中に来日した南方特別留学生とその指導にあたった著者との交流を綴った記録で、上遠野は戦後彼らと再会した時もお「おねえさん」と呼ばれて慕われた。

以上、第三期の動向をまとめると、八〇年代に入ると被爆した南方特別留学生の広島訪問が相次ぎ、広島市民の前で被爆体験を語り始めるとともにその被爆実態の詳細が明らかとなっていく。また、第二期で形成された記憶の原型を基に文学や平和学習としての対象化が進行した。そして九〇年代前半には被爆した南方特別留学生の存在が各種メディアで取り上げられ、被爆五〇年を迎えた九五年にその表象の展開の頂点を迎えたといえよう。

(三十一) 平和学習としての対象化「オマールさんを訪ねる旅」

被爆した南方特別留学生に関する表象の展開は京都で盛り上がりを見せる。京都・修学院小学校では校区内にオマールの墓があることから、広島への修学旅行の際に平和学習の一環として興南寮跡碑の前での平和集会を実施している(一九九一年から開始、二〇一四年に一旦途絶えるが一八年から復活)。

その実施に至る経緯については次のとおりである。まず九〇年七月に広島への修学旅行が決定し、同年一月のPTA主催の地域めぐりでオマールの墓を発見し、一二月に圓光寺・古賀住職から聞き取りをおこなっている。翌年二月の参観懇談会で児童と保護者が一緒にNHK番組「わが心のヒロシマ」を鑑賞し、四月の広島への修学旅行において興南寮跡碑前で平和集会をおこなった⁽³¹⁾。

その具体的な取組内容としては、オマールにゆかりのある関係者、例えば、看病にあたった浜島医師、東京での日本語の先生、被爆後一緒に野宿した女学生、墓碑の建立者、マレーシア大使館等に児童が質問の手紙を出し、返ってきた手紙をもとに修学旅行の事前学習をおこなった。修学旅行先の広島では、平和公園で同小学校の活動やオマールのことを書いた交流カードを通行人に渡し、児童あてに返事をもらう取組みをおこなっている。

修学院小学校のこのような取組みをまとめたものが、早川幸生編『オマールさんを訪ねる旅』(かもがわ出版、一九九四年)として出版されている。この本を読んで感銘を受けた土井たか子衆議院長(当時)は、九四年八月にマレーシアを訪問した際にオマールの妹アザーに会って同書を贈呈した⁽³²⁾。

オマールを題材とした修学院小学校での平和学習の取組みは、歌や構成劇、絵本の作成へと昇華していく。九四年、各児童が作

った詩から、歌係の児童が言葉を選び、メロディを考え、教師がまとめた上で、オマールに捧げる歌「希望をのせて」を作詞、作曲した⁽³³⁾。同年一〇月の学習発表会では構成劇「希望をのせて——オマールさん物語——」を上演している。更に翌九五年、児童による手作り絵本『オマールさんを訪ねる旅』が作成され、戦後五〇周年記念行事で来日して修学院小学校を訪れた元南方留學生に対して贈呈された。

また、同時期に京都で展開された別の取組みとしては、九四年に同志社中学校の英語部生徒が脚本を作って、オマールの英語劇「The Shooting Star of Malaya」を上演し、京都市中学校英語学習発表会で金賞を受賞した⁽³⁴⁾。九五年には京都原水爆被災者懇談会（世話人代表：永原誠）が、反核ビデオ「オマールさんを知っていますか？」を制作している。なお、永原誠の父は興南寮の寮監で、広島で被爆死している⁽³⁵⁾。

当時、修学院小学校教諭として児童の取組みを指導した早川幸生は、「私自身も失敗したことがあります。平和教育というところ、どうしても戦争の悲惨さを強調する方向に傾いて、結果的に子供を委縮させることがあります。地域学習から入ったこの実践は、オマールさんの具体的な人生を通して学んだことが良かったと思います⁽³⁶⁾」、「オマールさんの物語を通じて、児童は京都にいても広島島の原爆のことを学ぶことができる。また、被害や加害の問題についても学ぶことができる⁽³⁷⁾」と振り返っている。

以上紹介してきた取組みの中でも、修学院小学校の児童による手作り絵本『オマールさんを訪ねる旅』には、南方特別留學生の被爆の事実が戦後の日本社会でどのように語られてきたのが集

約されていると考えられるので、引用が若干長くなるがここでその内容について検討したい。絵本はA4判二四頁で構成されているが、見開き全面に絵と文字が配置されることよってA3判二枚分から成っている。

（見開き一）

こは、京都の比えい山のふもと。／一乗寺にある円光寺というお寺の墓地です。／ほら見て下さい。／一つだけ形のがうお墓があります。／お墓の中でねむっているのは、／「サイド・オマール」／というマレーシア人だそうです。／「なぜ、マレーシア人のお墓がここに？」／「オマールさんでたれ？」／ここからオマールさんを／訪ねる旅が／はじまりました。／みなさんもいっしょに、／旅してみませんか。

見開き一では、児童達が小学校の近くにあるお寺で変わった形のお墓を発見して、「なぜ、マレーシア人のお墓がここに」、「オマールさんでだれ」と疑問を持つところから「オマールさんを訪ねる旅」が始まる。早川が指摘するように地域学習の身近な話題から導入部分が始まっていく。

（見開き二）

サイド・オマールさんは、／一九二六年七月二八日／マレーシアのジョホール州のサルタン（王族）／の一人として生まれました。／オマールさんが十七歳のころのマレーシアは、／日本が占領していました。／日本語の成績が抜群だったオ

オマールさんは、／南方特別留学生として、／日本に勉強に行くことになりました。

見開き二では、オマールの生い立ちと日本軍の占領により南方特別留学生として日本に留学することになったことが説明される。ここでは外国人被爆者に特有な問題として、「なぜ広島で被爆することになったのか」という前史としての理由が語られている。

(見開き三)

日本に来たオマールさんは、／東京の本郷寮で六カ月間、／日本語を上遠野先生に／教えてもらい、勉強しました。／そんなに月日がたつていないのに／とても字がきれいでした。／後に、オマールさんは／広島から東京の上遠野先生へ／手紙を送りました。／手紙の中には、／こんな事も書いてありました。／「待ちこがれの夏が近づいて参りました。」…と／オマールさんはどんな気持ちで／夏を待ったのでしょうか…。

(見開き四)

オマールさんは、広島文理大に、／入学しました。／万代橋のたもと広島大学の興南寮で、／暮らしていたのです。／興南寮前の、元安川のほとりで、／ラザックさんや他の留学生たちと／過ごすが、ありました。／「今夜も空襲警報が鳴るのかしら。」／「食事の少なさにも参ってしまうね。」

／「きれいな夕焼けね。」／「マレーシアと同じです。」／「マレーシアでの事を思い出しますね。」／いつのまにかみんなで／「ラサ・サヤン」／を歌っていました。

見開き三、四では、東京と広島での留学生生活が語られる。戦時中の空襲警報や食糧不足に悩まされるなか、興南寮の前にある元安川のほとりで夕焼けを見てマレーシアを思い出し、故郷の歌「ラサ・サヤン」をみんなで歌うことによって望郷の念に駆られる。

(見開き五)

八月六日八時十五分／オマールさんは／興南寮の自分の部屋で上半身裸になって／アイロンをかけていました。／ピカ／ツ。／強烈な閃光が走りました。／オマールさんは気がつく／と寮の建物の／下じきになっていました。／自力で外にでることができたオマールさんは／友達や先生を探し歩きました。

(見開き六)

オマールさんが、歩いていると／「水をください。」／水をください。」／とあちらこちらで／声が聞こえます。／オマールさんは、／友達と水をくみに行き、／けが人に水を、／飲ませました。

(見開き七)

一瞬のうちに灰になった／広島の前。／外で野宿するしかない

い／オマールさんたちは、／広島大学の構内で／野宿生活を
はじめました。

(見開き八)

オマールさんは、／世話になった／日本人の引越しを／手伝
ったり、／焼け出された子供や老人に／雑炊を分けあたえ
りました。

見開き五から八では、オマールが興南寮で被爆した後、留学先
の広島文理科大学の校庭で野宿する様子が描かれている。オマー
ルは自らが傷ついているにもかかわらず、お世話になった日本人
の引越しを手伝い、負傷者に食料を与え、その思いやりのある親
切な行動が語られる。

(見開き九)

救助活動を続けていたオマールさんたちの／ところに、嬉し
い電報がとどきました。／マレーシアへの帰国を許可する知
らせです。／八月二十五日午後十時十五分の汽車で、／オマー
ルさんたちは広島をたちました。／万葉集が好きだったオ
マールさんは、汽車に／乗る前日、短歌を作りました。／「母
を遠くに離れてあれば／南に流るる星のかなしけり」／汽車
の中で、オマールさんはしきりに／悪感を訴えていました。

見開き九では、戦争が終わった後、母国に帰国することとなり、
広島を発する。その前日に作った短歌には故郷や母への思いが

綴られている。しかし、汽車の中で悪寒を訴え、原爆症の徴候が
示される。

(見開き一〇)

オマールさんは、東京へ行く途中、／京都で突然異常を訴え、
／京都大学附属病院に入院しました。／原子爆弾ということ
ばも知らない医師たちは、／京大病院の第一号の原子爆弾患
者として、／入院したオマールさんを前に、／助かる方法は、
輸血以外にないと考えました。／血液型がオマールさんと同
じ〇型だった／浜島医師は、自分の血液を毎朝晩、／オマー
ルさんに、輸血しました。

見開き一〇では、オマールが東京へ行く途中で突然異常を訴え
て、京都大学附属病院に入院する。当時の医療状況では治療は難
しく、浜島医師はやむを得ず自分の血液をオマールに輸血する。
ここでは被爆から約三週間が過ぎてオマールが原爆症を発症して
いることが示唆されている。

(見開き一一)

「日本にさえ来ていなかったらこんな苦しいめに／会わ
なくてすんだのに……。／オマール君、君は、日本人を恨んで
ないか。」／「先生は、毎日ぼくに血を分けてくださったって／
いるでしょ。先生とぼくは兄弟です。ぼくの体の／半分はも
う日本人です。」／「ドクター。夕焼け小焼けを歌ってくれ
ますか。」／「ああいいとも。夕焼け小焼けで日がくれて……。」

／オマール君。おい、オマール君。／オマールさんは、浜島先生がかたをゆすつても／目をあけませんでした。／一九四五年九月三日のことでした。

見開き一で物語はクライマックスを迎える。日本に来ることがなければ原爆に遭うこともなかった、日本人を恨んでいないかと浜島医師から問われて、オマールは恨み言ひとつ言わずにドクターに血を分けてもらった自分の体は半分日本人であると答える。そしてオマールの好きな歌だった「夕焼け小焼け」を聞きながら息を引き取る。この場面では、日本軍の占領により来日することとなったオマールが被爆死する背景として、読者に被害と加害の問題を意識させる内容となっている。

(見開き一二)

あれから五十年。／原爆が落とされた町、広島。／私達の町、修学院。／この二つの町を結んでくれた／サイドオマールさん。／私達は忘れません。／オマールさんの／やさしさ／心の大きさ／そして明るさを／私達は誓います。／未来に向かって／二度と戦争は起こさないと。

最後の見開きでは、「オマールさんをたずねる旅」から現代に戻ってきて、オマールの死とその思いやりと優しさに溢れる行動を振り返り、二度と戦争を起こさないことを誓うことよって物語は「平和の希求」へと昇華していく。

以上検討してきたようにオマールの物語では、被爆前史としての来日経緯や東京・広島での留学生生活、被爆の状況、校庭での野宿生活、被災者の救援、原爆症の症状、加害と被害の問題、平和希求への昇華等が、平和学習の素材としてわかりやすく語られている。この物語には、戦後の日本社会において被爆した南方特別留学生在がどのように受け止められてきたのか、その表象の展開が集約されているといえよう。

第四期 留學生の高齡化・死去、記憶の継承が課題に

(一九九六～現在)

(四一) 留學生の高齡化、死去

一九九五年以降、被爆した留學生らは七〇歳を超えて高齡化が進み、鬼籍に入る者もでてくる。九七年にアデル・サガラが逝去し、二〇一〇年にアリフィン・ベイが、一三年にアブドゥル・ラザクが、一四年にハッサン・ラハヤが、そして一六年にペラン・ユソフが鬼籍に入ることよって、広島で被爆した南方特別留學生は全員が亡くなった。留學生本人や関係者の高齡化あるいは死去にともなう、その記憶の継承が課題となっている。

(四二) 記憶の継承

こうしたなか二〇一〇年以降、被爆した南方特別留學生の戦後の歩みを扱った書籍が相次いで刊行される。日本では橋本明『共に生きる…ブルネイ前首相ベンギラン・ユスフと「ヒロシマ」』(財界研究所、二〇一一年)や宇高雄志『南方特別留學生ラザクの「戦

「後」(南船北馬舎、二〇一二年)が出版され、マレーシアでは Kalthom Husain 他『Razak Sensei』(国立言語図書研究所、二〇一五年)が刊行された。これまでの書籍では来日経緯や広島での被爆状況を中心に記述されていたのに対して、右の書籍の特徴としては彼らが戦後母国でどのように生きてきたのかにより重点が置かれている。

また、二〇一三年には広島大学から当時存命中であった被爆した南方特別留学生三名(アブドゥル・ラザク、ハッサン・ラハヤ、ペンギラン・ユソフ)に対して名誉博士号が授与された。名誉博士号授与に関する資料と関係者による寄稿文が、『被爆した南方特別留学生への名誉博士号授与の記録』(広島大学、二〇一五年)としてまとめられている。

外国人被爆者の場合、生き残った者も戦後その多くが帰国し、日本社会においてその存在が想起される機会は多くはなかった。南方特別留学生をはじめとして周縁化された外国人被爆者の存在は、本人や関係者の高齢化あるいは死去によって日本社会において急速に忘却されうる可能性がある。

3 まとめにかえて

本稿での考察から、第二期(一九五七―八二)に戦後の日本社会における被爆した南方特別留学生に関する記憶の原型が形成され、第三期(一九八二―九五)にその表象が展開し、被爆五〇年の九五年にピークを迎えたことが確認できた。しかし、その後現在に至るまでその記憶の継承が課題となっている。最後に記憶の

継承に関する最近の動向として次の三つの事例について述べておきたい。

第一に、被爆死した留学生を伝える二冊の絵本が一九年八月六日に刊行された。平和記念資料館ピースボランティアの青木圭子はニック・ユソフの物語『ユソフさん』を自費出版した。日本語と英語で併記されたその絵本は、光禅寺に眠るユソフが被爆当時の状況を現代の私たちに語りかける内容となっている。また、京都の歯科医師の古田博一は、幼少の頃からオマールの墓の存在に関心を持ったことがきっかけとなって、オマールの物語を描いた『オマール王子の旅』(あいり出版)を出版した⁽³⁸⁾。力強く豊かな色彩で描かれたこの絵本は、被爆した南方特別留学生の物語としては初めて福島の原発事故のことにもふれている。これらの取組みは、絵本というわかりやすく印象に残る媒体を用いることによって、次世代を担う子供たちも含めて幅広い層に知ってもらうのに大変効果的であるだろう。

第二に、一九年春に圓光寺近くの住民らが「圓光寺に眠る被爆南方特別留学生サイド・オマールさんを語り継ぐ会(圓光寺オマールさんの会)」を結成した。元々は七四年に有志によって「オマール君の墓を守る会」が設立され毎年法要を開いていたが、同会は〇八年に解散し、その後は寺が独自に法要を続けていた。しかし寺だけで続けるには限界があるとして、大坪慶寛住職が修学院小学校元教諭の早川幸生に相談し、今回の会の発足につながっていた。「守る会」の発足当時は被爆した南方特別留学生のことを知る関係者も多かったが、次第に高齢化が進んでその継承が困難となった。この課題を克服するため、「オマールさんの会」は大

切な歴史を地域で学ぶ機会と位置づけて発足している⁽³⁾。地域を巻き込んだこのような取組みは、継承活動を持続していくための解決策の一つとなりうるであろう。

第三に、一九九年八月、被爆した南方特別留学生在が被爆後間もない時期に書いた手紙やはがきが、栗原明子により平和記念資料館に寄贈された。冒頭でも述べたように、同館ではリニューアルオープンにあわせて南方特別留学生的の写真を本館展示に加えたが、実物資料の所蔵はこれが初めてであった⁽⁴⁾。これらは、ペンギラン・ユソフとアブドウル・ラザクが滞在先の京都や東京から、被爆後約一週間をともに過ごした栗原へ宛てたものであった。終戦直後の京都の街の様子やオマールが死去したこと、東京でアリフイン・ベイとアデル・サガラの白血球が半減して入院したこと、自らの命が助かったことに対する感謝の念などが自筆で書き綴られており、当時の状況や留学生的らの思いが鮮明に伝わってくる。

平和記念資料館館長の志賀賢治は「被爆者がいなくなると、主役は資料です」と述べているが⁽⁴⁾、外国人被爆者の場合、日本で実物資料を見つけることは大変困難である⁽⁵⁾。南方特別留学生在が被爆したことを伝えるこのような実物資料の存在は、今後ますます重要な意味を持つてくるであろう。

これらの事例から継承活動を持続するための手掛かりとして、(1) 分かりやすく印象に残る媒体の活用、(2) 地域を巻き込んだ活動、(3) 実物資料の収集、保管、活用といった点を指摘できるだろう。

被爆者が不在となる時代が迫っているなか、被爆した南方特別留学生に関する記憶や表象は今後どのように展開されていくの

か。本稿でも考察したように外国人被爆者をめぐる諸問題は、その時代の日本を取り巻く国際関係や国際情勢の影響を少なからず受けており、この点にも留意する必要があるといえよう。

注

1 更新前の常設展示においても直接被爆者の説明の中で外国人被爆者の存在を示す記述はあったが、実物資料や写真の展示はなかった。

なお、今回の展示は、二〇一一年度第一回企画展「生きる」で紹介した外国人被爆者に関する展示方法を基にしている。以上、第二回市民・被爆者交流公開講座「ヒロシマの再考察・外国人被爆者（非軍人）」における同資料館学芸課の落葉裕信・学芸員の講演（二〇一九年七月六日実施）による。

2 「広島平和記念資料館展示整備等基本計画」（広島市、二〇一〇年）、一四頁。広島市ウェブサイト (<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/content/1278924556749/index.html>) から閲覧可能。

3 拙稿「被爆した南方特別留学生と戦後の日本社会——一九五〇年代半ばから一九六〇年代半ばまでの時期を中心として——」（『史学研究』第二九九号、二〇一八年）。なお本稿は同論文と重なる部分があることを断っておく。

4 南方特別留学生的の被爆状況の詳細については、江上芳郎『南方特別留学生招聘事業の研究』（龍溪書舎、一九九七年）を参照。

5 京都大学附属病院発行の死亡診断書には九月三日夜に死亡と記載されているが（広島大学文書館所蔵資料）、江上芳郎の研究によると当時オマールの看病をした留学生は九月四日早朝に死亡したと証言している（前掲江上著書、二二九頁）。

- 6 宇吹暎『ヒロシマ戦後史…被爆体験はどう受けとめられてきたか』(岩波書店、二〇一四年)、五頁。
- 7 後年、同書の改訂版が稲富栄次郎『広島原爆記』(講談社、一九七三年)として刊行されている。
- 8 一九五七年七月二四日付『中国新聞』。
- 9 これらの書簡等は広島大学文書館に保管されている。詳しくは前掲拙稿を参照。
- 10 一九五七年七月二三日付『朝日新聞』。
- 11 一九五七年八月一八日付『中国新聞』。
- 12 前掲拙稿を参照。
- 13 この番組はプラハ国際テレビ祭のドキュメンタリー部門で佳作を受賞した。現在、横浜市にある放送ライブラリーでこれを視聴することができる(音声は英語のみ)。
- 14 『週刊朝日』一九五八年八月三日号。
- 15 詳細については、園部健吉『被爆南方特別留学生 オマール少年の墓』(私家本、一九八〇年)を参照。
- 16 一九六一年九月二日付『京都新聞』。
- 17 橘俣子「国際理解と国際誤解——南方特別留学生オマールさんの二度の埋葬をめぐる」(『思想の科学』一九九六年五月号)。
- 18 建立の経緯については、前掲拙稿一五〜一六頁を参照。
- 19 「客死マレーシア留学生の慰霊墓参について」(『月刊アジアの友』第一九号、一九六四年六月、九〜一四頁)。
- 20 同前。
- 21 前掲拙稿。
- 22 川口隆行『原爆文学という問題領域(プロブレマティク)増補版』(創言社、二〇一一年)、七二〜七三頁。
- 23 前掲拙稿。
- 24 花岡正雄「興南寮跡碑の思い出」(広島大学『被爆した南方特別留学生への名誉博士号授与の記録』、二〇一五年、七九〜八二頁)。
- 25 一九九五年三月三一日付『朝日新聞』。
- 26 前掲江上著書、二四三〜二六〇頁。
- 27 広島大学広報委員会『学内通信』(第一四期八号、一九八三年)に所収。また、翌年同タイトルで広島・長崎の証言の会『ヒロシマ・ナガサキの証言』(第九号、一九八四年)にも所収。その後、江上は南方特別留学生の日本での留学状況を全般的に調査し、『南方特別留学生招聘事業の研究』としてまとめている(前掲江上著書)。
- 28 前掲江上著書、二六三〜二六六頁。
- 29 烏賀陽弘道「大東亜の人質 南方特別留学生の半世紀」(『アエラ』一九九一年八月二〇日号)。
- 30 二〇〇二年に同書の改訂版が同タイトルで暁印書館から出版されている。
- 31 早川幸生「地域学習で出会った平和教材『南方特別留学生』、歴史教育者協議会第四四回大会発表資料、一九九二年八月。
- 32 本文前掲『アジア戦時留学生』、一〇〇頁。
- 33 一九九四年四月八日付『朝日新聞』。
- 34 本文前掲『アジア戦時留学生』、一〇五〜一〇六頁。
- 35 同前、一〇六頁。
- 36 同前、一〇五頁。
- 37 「被爆した南方特別留学生に関する研修会」(二〇一九年二月一日、広島平和記念資料館で実施)における早川幸生の講演。

38 以上、二〇一九年八月一四日付『朝日新聞』および二〇一九年九月二日付『中国新聞』を参照。

39 以上、二〇一八年一月二四日付『中国新聞』および二〇一九年八月一四日付『朝日新聞』を参照。

40 二〇一九年九月二日付『中国新聞』。

41 二〇一九年三月二七日付『朝日新聞』および小田原のどか「二つの原爆資料館、その『展示』が伝えるもの」(『美術手帖』ウェブサイト、二〇一九年七月二八日付、同年九月一二日閲覧、<https://bijutsutecho.com/magazine/insight/20226/>)

42 広島平和記念資料館展示検討会議においても、外国人被爆者に関する展示の重要性が確認されているが、課題としてその実物資料を所蔵していないので展示が難しいことが指摘されている。「第三回 広島平和記念資料館展示検討会議要旨」(二〇一〇年一月三日開催、平和記念資料館ウェブサイト、二〇一九年九月一六日閲覧、http://hpmnuseum.jp/modules/info/index.php?action=PageView&page_id=188)を参照。